

原村寛氏 — 岩石・鉱物の分析一筋に30年

久 城 育 夫 (地質学教室)

原村寛氏は、昭和26年に東京工業大学内財団法人工業振興会に勤務すると同時に同大学の分析化学教室の岩崎研究室の研究生となられた。昭和35年4月、東大理学部(地質学教室)に技術員として着任され、同年11月に教務員、38年に文部技官教務職員、そして63年10月に文部教官助手になられた。

東工大分析化学教室においては岩崎岩次教授および桂敬教授より指導を受けられ化学分析の技術を修得された。昭和35年に東大理学部に着任されて以来、29年間にわたって数多くの岩石、鉱物の化学分析を行い、地質学教室の研究活動に非常に大きな寄与をされた。本理学部に着任される数年前から既に東工大において、地質学教室から依頼された試料を分析されていたので、原村氏の実質的な寄与は30年以上に及ぶことになる。この間当地質学教室だけでなく、鉱物学教室、地震研究所や海洋研究所、および他大学の地学関係の教室からの分析の依頼にもしばしば応じられた。これまでに行った分析の総数は4,000近くにもなる。これは大変な数で並大抵では出来ないことである。すなわち、この分析数を30年間に均等に割り振ると、3日に1個の割合になる。岩石や鉱物は成分の数が多く分析に手間と時間がかかり、また試料によっては二度分析を繰り返すことを考えると、この割合は驚異的である。数だけではなくそれら

の地球科学に対する貢献度も極めて大きい、例えば世界的に有名になった故久野久教授の日本の火山岩の研究は、原村氏の分析に負う所が大きい。また、造岩鉱物の研究において地質学教室は1950年代の後期から1960年代にかけて優れた研究を数多く行なったが、それらはやはり原村氏の分析に負っている。その他、実に多くの研究に貢献され、お世話になった学生、教官は数十人に及ぶ。

これらの分析の一部はまた、原村氏御自身の研究ともなっており、共著を含めて20数篇の論文を内外の学術誌に発表されている。中でも、都城秋穂博士(現在、ニューク州立大学教授)と共同研究として行なった日本の各地質時代における堆積岩、特に頁岩の分析や隕石の分析は国の内外の研究員の貴重なデータとなっている。また、1969年にはアポロ11号による月の岩石の分析を日本で最初に行なった。翌年のアポロ12号の玄武岩の分析では、NASAのX線蛍光分析では見られなかったマグマの分化作用を見事に示すことができた。月の岩石の分析は量が少ないことに加えて、世界の一流の分析者との一種の競争でもあり神経をすり減らすことであったと推察する。

原村氏は分析技術に優れ、また大変慎重であるため同氏の分析結果は信頼性が高く、国内はもとより世界的にも高く評価されている。特に、分析が極めて困難である隕石の分析では、同氏は米国

の Smithsonian 研究所の Jarosewich や、フィンランドの地質調査所の Wiik などと共に世界でも五指に数えられる程である。最近南極において日本の観測隊が採取した多量の隕石の分析を極地研究所から依頼されて行っている。原村氏は困難な分析を好まれ、隕石の分析などには特にファイトを燃やされるようである。

2号館時代は、分析室は地下にあって薄暗く、原村氏はそこで孤独に黙々として分析を続けられていたが、5号館に移ってからは3階の本部庁舎のすぐ向かいの明るい分析室で、本部の職員の人達を眺めたり、また眺められたりして分析を行ってこられた。昭和41年11月から翌年の5月までは、アラスカ大学から招聘されて岩石の分析を行なっ

た。伺ったところによると、同氏は寒さに強いようで、摂氏零下30—40度の戸外を悠然(?)として歩いておられ周囲の人が驚いたとのことである。

原村氏は山が好きで、今も時々暇をみては山歩きに出かけておられる。先日、地質学教室のリクレーションで丹沢に登った折りには若い人達に遅れをとらなかつたそうである。定年後も元気で山歩きを存分に楽しまれることを心から願っている。今後も南極隕石の分析が続けられるとのことなので、山歩きばかりされるわけには行かないであろうが、今までよりは酸やアルカリの臭わない空気をもっと吸われる機会をつくっていただきたいと思う次第である。今後どうぞお元気で。